

製造業の未来を担う 若きリーダー達

小さな頃から、モノづくりの現場で働く父親の後姿を見て育った若者達は、これからのニッポン製造業にどんな光を与えてくれるのだろうか？ 次世代のリーダー達が引き継いだモノづくりDNA、そして新しい感性の融合によって生まれる彼らの取り組みを探ることで、ニッポン製造業の未来が見えてくるはずだ。

最上インクス、そして日本のモノづくりの 未来のリーダーとして世界を渡り歩く

最上インクス リピート統括G 統括G長
鈴木 滋朗氏

鈴木は24歳の時、語学習得を目的に渡米を決意した。しかし自分の決意をかなえらるうえで、父・鈴木三朗社長とひとつの約束を交わす。それはこの最上インクスを継ぐことだった。

渡米後は、学業の傍らシカゴの板金屋で働いた。実務を身につけるより、異文化のなかで働き給料よりも「経験」を優先したのだ。その結果、「腕」よりも「人間力」を磨くことができた。鈴木は微笑む。

鈴木は2年半のアメリカ生活のなかでさまざまな仕事・経験をしてきた。現場・生産・品質管理——そのどれにおいても、この間の経験が役立つている。入社後は各業務の責任者として現場を踏んできたが、そこでも、リーダーとして必要なことが「視点の高さと本質を見抜く力」「考えることと決断する必要性」「責任を負うこと」「信頼を得ること」であるのを学んだという。

未来を進む若きリーダー鈴木に製造業の10年後について聞いてみた。
「大きな変化(新化)が起きる10年」

鈴木は、製造業の10年後の変化を新化と捉えている。経済市場も成熟している状態(停滞状態)少子化・生産販売型経営から感知反応型経営への転換・グローバル化/ボードレス化・ITによる、情報の効率化/スピード/同時性等、鈴木はさまざまな要因をあげ、これらを踏まえ、最上インクスの未来を次のように語る。

「製造業に限らず、大きく経営(仕事)の質を変える時だと思う。だからこそチャンスも多い。これからは自分たちで、ビジョンを描き、儲かる仕掛け(ビジネスモデル)をつくりだし成果を出す集団(企業)をつくり上げていくことだと思う」

モノづくりが大好きな若者が集まった、平均年齢31歳の最上インクス。

鈴木にとつてモノづくりとは？
「できた喜び・つくる喜びをリアルに感じられるもの。そして、つくり手の想いが映し出される鏡のようなもの」
目を輝かせて鈴木はそう応えた。

Q もっとも影響を受けた人物
父親(鈴木社長)と経営者仲間、創業者(鈴木氏の祖父・嘉行氏)、渡米先で働いた板金屋の社長

Q 愛読書
・田坂広志氏の本。ものの考え方・見方を本質で紹介している。

「仕事の思想—なぜ我々は働くのか」『意思決定12の心得—仕事を成長の糧とするために』(以上、PH P 研究所刊)など数多くのビジネス書を出版。

・アメリカの経営学者P・F・ドラッカーの著書。『実践する経営者—成果をあげる知恵と行動』『仕事の哲学 ドラッカー名言集』(以上、ダイヤモンド社刊)。

Q 10年後の最上インクス

既存の事業を拡大していくこと。それから、将来は世界も視野に入れてビジネスを展開していきたい。夢・ビジョンを原動力とし、理念に基づき行動する会社になりたい。それが、創造し・挑戦し続ける集団になる。

編集部/金澤亜希子
写真:引地信彦



すぎき・しげあき
31歳。高校卒業後、機械装置製造会社へ就職。その後、語学・機械工学等を学ぶため渡米。現在は、リピート統括グループ統括グループ長として、新規事業・既存商品のリピート品事業を統括する仕事をしている。